法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-02-15

キューバ国民文学編成における「キューバ性」の研究

KUNO, Ryoichi / 久野, 量一

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
科学研究費助成事業 研究成果報告書
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
5
(発行年 / Year)
2014-06

Hosei University Repository

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０３７４

研究課題名（和文）キューバ国民文学編成における「キューバ性」の研究

研究課題名（英文）A study on "Cubanity" in the Formation of a Cuban National Literature

研究代表者
久野　量一（KUNO, Ryoichi）

法政大学・経済学部・教授

研究者番号：７０４０９３４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,200,000円、（間接経費）　660,000円

研究成果の概要（和文）：　20世紀のキューバ文学における「キューバ性」は、1902年の独立とともにカリブ周辺国とは様相を異にして、国民文学創設とともに議論された。クリオーリョ知識人たちはアヴァンギャルド期に「キューバ大国主義」とも言うべき言説を立ち上げ、仏語圏カリブ諸島で展開されていた黒人文学運動の影響は受けつつも、軽微にとどまり、キリスト教的世界観に基づいたキューバ像を打ち立てた。
「革命」はその「キューバ性」を強固にした。革命後キューバを離れた亡命者によって編み出されたキューバをめぐる言説は、革命政権の言説と鏡のように対をなし、革命派と亡命知識人側が「キューバ性」をめぐり所有権争いを行う状況であることを確認した。

研究成果の概要（英文）：The "Cubanity" of twentieth-century Cuban literature were set into motion with the formation of a national literature at the time of the country's independence in 1902, and in this way, Cuba exhibited a different characteristic than its neighboring Caribbean countries. During the avant-garde period, Criollo intellectuals established a discourse that described Cuba as "a Great Nation". This discourse was influenced by the black literature movement that was developing in the French-speaking Caribbean countries, but it never became significant. An image of Cuba was always based on the Christian worldview. The Revolution of 1959 was meant solely to strengthen this "Cubanity". After the Revolution, the discourse on Cuba (that was created by exiles who left the country) formed a counterpart, rather like a conflicting mirror image, to the discourse of the revolutionary regime. The faction that supported the revolution and the intellectual exiles battled over the ownership of this "Cubanity".

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：国民文学　キューバ　カリブ　ナショナリズム

Hosei University Repository

１．研究開始当初の背景

研究代表者は 20 世紀の終わりごろからキューバを定期的に訪れ、キューバの文学にさまざまな形で触れ、特に革命政権の文化政策にかかわった言論人たち（おもに文学者）の言論活動を見聞する機会を得た。

1959 年の革命政権樹立以降、政権側は文化政策を進めるうえで作家たちに留保つきで言論活動の自由を認めてきているものの、その留保の度合いをめぐって政権と作家たちは多くの場面で対立し、ほとんどの場合、権力側が作家を暴力的に弾圧してきた。

21 世紀に入ってもなお、革命政権が続く状況下にいる私たちが、仮にキューバ独立（1902 年）以降の、つまり 20 世紀の「キューバ文学」を研究課題としてとりあげるとき、1959 年の革命と、いま述べた文化政策と言論人との関係を抜きに議論することは難しい。

つまり、20 世紀のキューバ文学の研究には大きく言って以下の二つの問題点があると考えられる。

(1)キューバの文学を語るとき、革命前と革命後が切り離されてしまいがちである。

この事態は、革命政権が、革命前を「悪」、革命後を「善」とする歴史観で整理するために起きていると考えられる。この歴史観によって、革命前であれ、革命後であれ、それぞれ言論人たちによって議論された「キューバ性」の探求を連続したものととらえることができていない。

(2)革命後のキューバ文学研究が、キューバ国内での研究と国外での研究とに切り離されてしまっている。

キューバ国内で言論弾圧事件などがあったために、キューバでは文学が政治問題化し、多くの亡命作家を生んだ。その後、アメリカ合衆国やスペインでキューバ文学に関する研究が進む一方、キューバ国内では国外の動向とかかわらない形で国民文学研究が進んでいる。

以上の二点の問題は、近年になってキューバの文化政策がやや柔軟になってきたことにより変化しつつある。

一つ目の問題については、21 世紀に入って革命前の文化状況に関する歴史資料が随時再刊されたり、キューバ国内でも革命直前、直後のキューバ文学についてかなり自由に研究できる環境が整ってきている。

二つ目の問題については、キューバと諸外国（特にアメリカ合衆国）との研究者の交流がわずかではあるが行われたり、亡命キューバ人とキューバ人が対話する局面も生まれつつある。もちろんこうした改善点が一過性のものである可能性も否定できないが、10 年以上前とは異なる状況が生まれている。

２．研究の目的

本研究は、こうした時代状況の変化に鑑み、キューバ文学史における「キューバ性」をめぐる議論が、「キューバ国民文学」編成とどのような関係をもっているのかを考察することを大きな目的とする。

「キューバ性」なるものがどのようなコンテクストで歴史上に生れ、それについてどのような議論が行われているのかを、革命前、後、1989 年のソビエト崩壊以降の三つの時代を通じて「連続的」に把握し、「キューバ国民文学」のなかに位置づけられていくのかを考察する。

また、公式の「国民文学」に回収できない異物の要素が、「事後的」に「国民的」なるものへ回収されてゆく過程を確認することをも考察の対象とする。

キューバ文学における「キューバ性」は極めて多義的な概念であり、多くの文学者は「キューバ性」を用いるとき、似たような概念として「アンティール性」、「カリブ性」、「島嶼性」、「植民地性」、「熱帯性」、「混淆性（クレオール）」と言ったタームをその場に応じて補足的に用いている。

本研究では、こうした多義的な意味の「キューバ性」に関する議論を、革命後に政権側が積極的に打ち出した「国民文学」創設のコンテクストといったん切り離し、革命前の文化状況のコンテクストにおいて整理する。

そのうえで、その後の革命後の文化政策のなかで、その「キューバ性」がどのような変遷をたどっているのかを明らかにする。

また、90 年代に入り、キューバの外で「キューバ性」がどのように議論され、それがその後国内の動向（政治体制の変化）とどのように連関しながら、総体として「キューバ国民文学」を成しているのか、その絵図を明確にする。

３．研究の方法

以下の文芸誌（①②③）を主たるコーパスと定め、そのなかから重要と考えられる言論人、知識人、文学者を選び出し、彼らのテキストを中心に据えて、革命前から革命後、そしてソビエト崩壊後の「キューバ性」を、他のカリブ地域との関連を踏まえながら検討する。

①革命前の主要文芸誌 2 誌（「*Orígenes*」と「*Ciclón*」）。

②革命後のキューバ公式の国際文芸誌（「*Casa de las Américas*」）。

③亡命キューバ人によって刊行されている文芸誌（「*Encuentro de la cultura cubana*」）。

Hosei University Repository

４．研究成果

(1) まず、1940 年代から 50 年代にかけてのキューバ島をめぐる文化的なアイデンティティについては、論文「キューバ・アヴァンギャルドとビルヒリオ・ピニェーラ」を通じ、革命前のキューバ文学の状況について明らかにした。

具体的には、ピニェーラの代表的ないくつかの短篇「La caída（落下）」、「La carne（肉）」、1943 年に発表された詩『*La isla en peso*（島の重み）』、「アンチ・キューバ文学」論、彼が刊行に主体的に関わった複数の文芸誌（「*Victrola*」と「*Ciclón*」）、アメリカ大陸内部の移動を通じての人的交流（とくにブエノスアイレスにおける文化活動）、外国文学の翻訳の成果などを、ラテンアメリカ・アヴァンギャルドの文脈のなかにおいて意味づけるように試みた。1940 年代から 50 年代の文献を、図版などを通じても紹介した。

こうした流れのなかで見たとき、マクロな水準ではピニェーラが、独立していたとはいえキューバの植民地的な地政学的ポジションを意識していたこと、また、島内の知識層の保守性に反発していたことを論証し、彼がフランス語圏アンティールの知識人も参照しつつキューバ文化の複数性を追求していることなども示唆することができた。

一方、ミクロな水準では、短篇の分析を通じてゲイであった彼の作品が伝統的な性の規範（たとえばマチスモ）に挑戦する同性愛文学となっていることを実証し、文芸誌などにおける彼の関わり方が、大陸間（トランス・アメリカ）の移動になっている点に着目し、従来の大西洋間（トランス・アトランティック）の移動によるアヴァンギャルドの「正統的」な伝播ではなく、アヴァンギャルドの「戯画化」となっていることを確かめた。

ヨーロッパの受容についてピニェーラは、ヨーロッパのさまざまな文化的な潮流（古典主義、バロック、ロマン主義、実存主義など）が燃え尽きた「無」、イメージとしては「墓場」をキューバに投影していることを論証した。そしてピニェーラにとってこの「無」、「墓場」という「否定」の力が「生」を躍動させるキューバ性なのではないかとの結論に達した。

(2)また、研究を進めるにあたり、他のカリブ地域を参照する必要が生じ、大陸部のコロンビアのカリブの文化状況を、論文「世界は変わり続ける――『わが悲しき娼婦たちの思い出』論序説」および、研究ノート「カルタヘナ・デ・インディアス――英雄たちの墓場」から明らかにした。

また、立命館大学国際言語文化研究所主催の環カリブ文化研究会で「プエルト・リコのアヴァンギャルド」と題し、キューバと姉妹関係にあるプエルト・リコの状況について考察を加えた（プエルト・リコとの比較考察については近刊）。

(3)革命前後のキューバ文学論および隣接カリブ地域の文化研究の動向を踏まえ、「キューバ、否定の詩学と肯定の詩学」によって、キューバにおける「アンティール性」観について考察を加えた。

(4)本研究計画の中心的存在であるキューバ作家の移動経験を考慮に入れた研究成果が、“Lectura de La caída de Virgilio Piñera”である。

(5)キューバ革命前後の知識人のキューバ観については、現在論文の執筆を進めているが、その概要は以下のとおりである。

革命後、島にとどまって「キューバ性」について思索を続けた表現者のなかで、その後亡命者によるテキスト生成に影響を及ぼしたと考えられるテキストがいくつか存在する（たとえば『低開発の記憶』）。これらのテキストの分析を通じ、キューバにおける「全体主義的体制」を支える文芸思想上の「全体主義的キューバ性」の議論とその影響力の大きさが明らかになる。

キューバをめぐるこのような「分割不能としてのひとつの島」の議論（これをさしあたって「キューバ性」と呼ぶ）は、他のカリブ諸島、とりわけ分断を余儀なくされた「プエルト・リコ性」と比較検討したとき、堅牢なひとつの建造物のようなものとして立ち上がる。20 世紀の国民文学論編成を通じ、キューバが作り上げてきたキューバをめぐる概念は、世紀半ばの革命によって、さらに外部の侵入を拒む言論制度になったと言える。

また、島の外部において行なわれるキューバ性をめぐる議論は、島の内部とは異なるコンテクストで編み上げられた、やはり堅牢な制度のようなものであり、現在のキューバ文学に関する議論は、島の内と外の双方がそれぞれ「キューバ」の所有権をめぐって争いを続けている状態であることを確認するに至った。

(6)ソビエト崩壊後のキューバ文学論については、「亡命地としてのアルゼンチン――アントニオ・ホセ・ポンテとカリブ文学研究をめぐって」を通じ、キューバを内から批判するポストコロニアル言説の様相を読み解いた。

具体的には、ポンテの試論『深遠なる食べ物』を分析し、ポンテが 16 世紀の王カルロス五世が目の前にしながら食べることを拒否したパイナップルをめぐる逸話に、ヨーロッパ的世界観からは捉えきれない「キ

Hosei University Repository

ューバ性」の源泉を認める論理の流れを明らかにした。
　ポンテはそのような逸話を提示することで、革命の正典文学史に対して内側からゆさぶりをかけるのだが、その試みは、短篇集『放浪者のこころ』において、さらに拍車がかかる。フィクションの力を利用して、ポスト革命のキューバを予見しているようにも読ませる作品に仕上げる。論文ではテキストに彼が仕込む読みの二重性を明らかにした。

(7)また、研究代表者は研究期間内に、キューバ、プエルト・リコ、ブエノスアイレスを訪れ、キューバ文学者、スペイン語圏カリブ文学研究者のネットワークの存在を確かめた。とりわけブエノスアイレス大学の研究ネットワークであるカリブ文学研究班は、そのメンバー構成からして、今後もカリブ研究におけるネットワークの基幹になると考えられる。研究代表者はこのグループメンバーと直接知りあいになり研究成果について意見を求めたり、あるいは共有することができた。今後ますますグローバル化が進み、人的ネットワークは広がることが予想される。彼らと連携していくことが肝要であることが確かめられた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6　件）
①久野量一、“Lectura de La caída de Virgilio Piñera”（Congreso Internacional de Letras, 2012, Universidad de Buenos Aires で発表）、Actas に掲載決定済み、査読有、未刊行。
②久野量一、「亡命地としてのアルゼンチン――アントニオ・ホセ・ポンテとカリブ文学研究をめぐって」、『れにくさ』、査読無、東京大学現代文芸論研究室論集、第 4 号、2013 年、92～106 頁。
③久野量一、「キューバ、肯定の詩学と否定の詩学」、『立命館言語文化研究』、立命館大学国際言語文化研究所、査読有、23(2)通号 106、2011 年、113～120 頁。
④久野量一、「キューバ・アヴァンギャルドとビルヒリオ・ピニェーラ」、『立命館言語文化研究』、立命館大学国際言語文化研究所、査読有、22(4)通号 104、2011 年、89～107 頁。
⑤久野量一、「カルタヘナ・デ・インディアス――英雄たちの墓場」、『経済志林』、法政大学経済学部学会、78(3)、2011 年、403～413 頁。
⑥久野量一、「世界は変わり続ける――『わが悲しき娼婦たちの思い出』論序説」、『立命館言語文化研究』、立命館大学国際言語文化研究所、査読有、21(3)通号 99、2010 年、185～192 頁。

〔学会発表〕（計　1　件）
①久野量一、“Lectura de La caída de Virgilio Piñera”, Congreso Internacional de Letras, Universidad de Buenos Aires, 2012 年 11 月 30 日。

〔図書〕（計　4　件）
①（翻訳）ロベルト・ボラーニョ、『鼻持ちならないガウチョ』、久野量一訳、白水社、2014 年３月、全 183 頁。
②（翻訳）ロベルト・ボラーニョ、『2666』、野谷文昭、内田兆史、久野量一共訳、白水社、2012 年、全体 868 頁（担当 615～855 頁）。
③（翻訳）フェルナンド・バジェホ、『崖っぷち』、久野量一訳、松籟社、2011 年、全 212 頁。
④久野量一、「ボルヘスの神話的イメージ――覚書」、法政大学比較経済研究所／長原豊編『政治経済学の政治哲学的復権』、法政大学出版局、2011 年、全体 492 頁（9～19 頁）。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
　　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
　久野　量一（KUNO, Ryoichi）
　法政大学・経済学部・教授
　研究者番号：70409340

(2)研究分担者

　　なし
　　（　　）

Hosei University Repository

研究者番号：

(3)連携研究者

なし
（　　）

研究者番号：